

町民参加の町史づくり



1997.9.30(火)

第12号



竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地
TEL・FAX兼用 (09808) 2-9985

目

次

第三回ぱいぬ島写真展
沖縄県地域史協議会研修会
網取村跡の碑建立祝賀会
『写真に見るわが町』
波照間島の隣鉱採掘
『新聞資料紹介』
隣鉱と海に輝く波照間島
波照間島の人口動態
『史料紹介』
西表治安裁判所の印影
『新聞で知る町の今昔』
柴田村政の顛末
『文化財探訪』
慶来慶田城屋敷遺跡
『聖地めぐり』
幸本御嶽
収蔵図書紹介
業務日誌
編集後記

(22) (20) (17) (16) (15) (14) (13) (7) (4) (3) (2) (2) (1)

•表紙の写真•

沖縄の米軍統治時代の最後の高等弁務官だったランバート高等弁務官が、弁務官資金の交付と台風28号災害後の復旧工事の進捗状況を視察するため1972年（昭和47）2月12日から14日にかけて八重山を訪問した。訪問先は与那国、竹富、波照間など9力所だった。西表島西部の祖納には2月14日訪れた。写真は西表小中学校を訪問した弁務官。

☆題字 大城正明

第三回ばいぬ島写真展

第四回ばいぬ島まつりで催され好評を博す

「人と自然が奏でる未来への序曲」をテーマに掲げた「第四回ばいぬ島まつり」が去る八月三十一日、大原にある町離島振興総合センターで開催され、多くの人々で賑わいました。同まつりでは「ばいぬ島写真展」（町史編集室主管）も催され、好評を博しました。写真展の参観者は延べ六百人に達し、写真を通じて古い時代の竹富町の姿を見聞しました。

写真は時代のひとコマを映し出し、歴史、文化、人生のドラマやロマンが脈打ち、見る人に感動を与えます。今回、展示した写真は写真集『ばいぬしまじま』（平成四年度発刊）に収録した写真、それに今後、発刊予定の『島じま編』に掲載する写真の中から精選したものも含めて百二点、さらに石垣市史編集室から拝借した写真五十四点を加えて合計百五十六点になりました。

写真展の写真は村の風景、村人の日々の暮らし、祭り、子供たち、教育、自然などと多彩で、それぞれに趣きがありました。写真からは、各時代が読み取れると同時に、時代をたくましく生きてきた村人の息吹を感じました。また時代の移り変わりを看取できました。参観者中には写真に母親を見つけて「おかあさん」と呼びかけ、懐かしく顔を撫でる光景も見受けられました。会場には写真集『ばいぬしまじま』も置き、気軽に見てもらいました。



盛況を極めたばいぬ島写真展

沖縄県地域史協議会研修会

—カムイヤキの島・徳之島で開催—



カムイヤキについて学んだ研修会

が、十月一日から二日までの二日間にわたり、徳之島町で開かれた。研修会には各市町村から二十六人の会員が参加し、研修を深めた。「道の島交流」では徳之島の伝統芸能が披露され、徳之島の関係者とお互いに親睦を図った。

研修会は初日、亀津のホテルで開催。徳之島文化協会会长・松山光秀氏の「徳之島の歴史と文化」と題する講演で始まった。この他、浦添市教育委員会文化課主幹の安里進氏が「亀焼（カミヤキ）窯とグスク時代の開始」、伊仙町歴史民俗資料館館長の義憲和氏が「亀焼（カミヤキ）と琉球」伊仙町文化財保護協議会会長の穂積重信氏が「徳之島の琉球服属について」をテーマに行つた。安里氏は、亀焼を類須恵器とし、石鍋と絡めて演題を開いた。

また「徳之島の自然の概況－両生類・は虫類を中心にして」と題し、県史料編集室主任専門員の当山昌直氏、「薩摩・道の島・琉球における宗門手札改めについて」と題して、糸満市役所の金城善氏が報告した。史跡巡見もあった。

網取村跡の碑建立祝賀会

—関係者が集まり除幕式—



記念碑建立祝賀会に参加した関係者

本土復帰の前年の一九七一年（昭和四六）に廃村になった、西表島西部の網取に村の足跡を記す記念碑が建立された。記念碑除幕式及び祝賀会は、八月三十一日に関係者が集まり挙行された。記念碑は、村を離れた人々の心のよりどころにしよう、と建てられたもの。久し振りに村に足を入れた人々は、感慨深げに屋敷跡を踏みしめた。網取村は古文書では一六四七年（順治四）に村落の存在が確認されている。村はそれ以降、盛衰を繰り返した。

〈写真に見るわが町〉

波照間島の燐鉱採掘

竹富町の最南端にある波照間島は琉球石灰岩からなる低島であるが、鉱物調査で燐鉱脈が埋蔵していることが分かり戦前、企業によって採掘で行われた。採掘場所は、北部落の北側の原野内にあり、跡地は鍾乳洞のように大きな口を開く。坑道は地下深く北方に向かって下田原城跡近くまで延びる。

島の燐鉱脈を発見したのは塩谷東一郎氏。一九二九年（昭和四）に試掘調査を行い明らかになった。一九三三年（同八）には福岡鉱山監督局に採掘を申請して許可を受けた。一九三五年（同十）になると、農学博士の恒藤規隆氏が本格的な理蔵量調査等を行い、採掘しても十分に採算のとれる理蔵量であることが確認された。

企業ベースで採掘が始まったのが一九三八年（同十三）頃。朝日化学肥料株式会社が採掘方法を考案し、実地調査を終えて採掘経営に乗り出した。調査の結果、推定理蔵量二百二十万トン、鉱質は最高四五%を示す良質の燐鉱であることが判明した。

朝日化学肥料（株）は、第一期計画として月産三千トンの採鉱設備を完成させ、県当局の築港計画実施と併行して最大能力月産一万トンを見込んだ。同社では坑夫を募集して採掘を円滑に進めた。採掘した燐鉱石を運ぶトロッコ用レールは、下田原城跡近くの坑口から、現在の港近くまで敷設された。港には木造桟橋も設けられた。



燐鉱の採掘現場

一燐鉱と海に輝く波照間島—

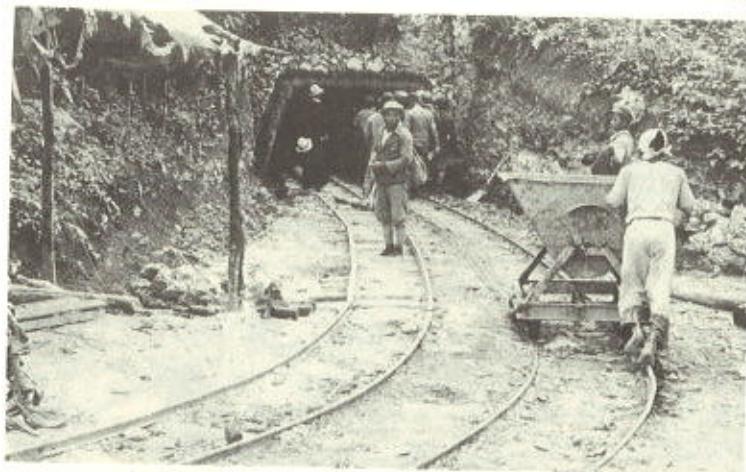
波照間島は石垣島を隔る、三十七海里の南に位し周囲三里二十七町、戸数二百

二戸、人口千三百余人、隆起珊瑚礁より成る孤島にして、何十万年或は何百万年の昔一の砂丘に海鳥が来り始め年を追ふて隆起膨大するにつれて多くの鳥類が棲息することになり今日の燐床をすることになったであらう。

此の燐鉱は十余年塩谷兄弟によって発見され、其の後恒藤博士も加はりて両方共に試掘十余年の日数と各十数万円の資金を投げられ（目下、恒藤博士の鉱区は中止状態）漸く有利確実と認められたので、昨年郡は製糸会社の傍系会社にして一千萬円の資金を擁する朝日工業会社が引き継ぎ経営することになった。

此の桟橋が竣工の後は燐鉱の積取りは勿論島民の利する処有形に甚大なるは申すまでもないことである。因に此工事は井上清氏等が請負ふこととなり、地鎮祭と起工式を兼ねて去る二十一日塩谷栄三氏会の下に莊嚴に挙行された。

波照間島は西南より東北に流れてゐる黒潮に抱かれてゐる関係上、鰯漁を始め幾多の魚族が盛んに徂來するので漁場としては与那国島に次ぐ好地位を占めてゐるが、人間不足のため目下鰯漁にのみ止まつてゐる。昨年は漁船七艘で魚獲高八万斤余、価格は手取六十円として十万八千円、此の内より油代と米代を引いた残りが漁撈者の手に落ちるので多きは一



採掘現場から港までトロッコレールが伸びる

そして鉱区面積二百万坪にして燐鉱埋蔵量三百万屯と推定されてゐる。目下選鉱された貯蔵鉱石が五千屯にして価格屯当り六十円、三十万円の宝が事変による積取船なきため現場と海岸に山積みされている。今の處、本坑が三ヶ所、試掘坑が二ヶ所にして、坑夫及び選鉱の女人夫百二、三十人が毎日働いてゐるが、事変解決後は相当大掛りに拡大せらること期待されてゐる。

今度波照間字に於いては、一万四十二円を投じ、長さ七十メートル、幅二メートルの突堤即ち桟橋を築造することとなり県は之に対し、七割補助の七千二十九円を交付することとなつたので会社は更に四十メートルを延長することとなるのであるが、自然深くなる関係上県の補助額よりも多くの費用を要する筈と見られてゐる。

円を投じ、長さ七十メートル、幅二メートルの突堤即ち桟橋を築造することとなり県は之に対し、七割補助の七千二十九円を交付することとなつたので会社は更に四十メートルを延長することとなるのであるが、自然深くなる関係上県の補助額よりも多くの費用を要する筈と見られてゐる。

人配当二百十五円、不漁船は百十円であつたとの事である。



カツオ漁船の大福丸

るから本年は組合員一同が緊樺一番、大馬力を出して味曾有の大漁なすべく協力邁進すべき年柄である。各組合とも製造納屋は十分完備されてゐるが、惜しむべくは大浜の際に当たり、冷凍施設がなきため筋が粗製に流れ安い憾みがあるのである。されば此の施設をせられて右の欠点を補ふと共に鰹後の鮮魚貯蔵に利用すべくその施設が欲しいものである。

斯くして始めて鬼に金棒の漁場が建設せられることとなる。波照間は鰹の外に鮪、トカキン、旗魚（カジキ）等が徂來する上に殆ど定着童謡の赤台が多く棲息してるので石垣町の糸満漁夫は三十七海里を往復して右の漁獲をさられ、尚西表、白浜の丸三漁業部は剝舟十四、五艘を曳きし来つて相当の漁獲をなし、丸三では是を氷詰めにして基隆に送り出し、好成績を挙げつゝあるのである。

本年は仲本信幸氏が更に一艘出すと謂はれる故、昨年通りの水揚げが觀らるゝとすれば二十万斤以上を獲得する事になり、価格にして目下の処百万円であるから優に二十万円と云ふ大金を觀る事にな

と謂へば今日発動機船によつて精巧の網を用ひ二、三千尋を流すことにすれば大量は間違ひなしであり、且つ市場に於ひても赤台に比べて三、四割高値に見られてゐれば多くの人と資本を要せずして最良の成績を挙げ得らるゝ何等疑ふべき余地はない。

斯る有利な漁場を有してゐながら地元の人達が他の仕事を指をくはえて眺めてゐることは心もとないことであるから地元人は此処にも考慮を払ふべきである。

波照間人は男女共其勇敢と精励の程は郡内中到底他字が真似も出来ず、亦学び得ることの不可能のほど熱烈にして眞面目の働きを發揮してゐる。之は波照間が瘦薄の地であつて昔の重い人頭税を負担した上に、自己の生活を維持し來た長い伝統と、一は斧一丁を携へて西表島に渡り、櫻樹を根切りして板に割きて桑の木を以て釣をこしらえて、航海船を造り来つて石垣島間の荒波を乗り切つて往復せられた、この忍苦欠乏に堪えた血が伝はつて今日の勇敢精励の美風をなしてゐることにある。

てゐる事は地質の関係もあり又市場と遠く離れてゐる故止むを得ぬとしても、折角の労務に對する報酬が余りにも貧弱であると謂はねばならぬ。

米や粟を収納した高倉



波照間の如き瘦土地にありては是非共桑の栽培を各戸四、五反歩づゝ植栽して養蚕をすることが第一である。戸口二戸として五カ年後には一戸当り五十貫以上百貫の繭収穫を目標に進んで行つたならば必ずや少なくとも一万貫に達することとなるであらう。貫當り五円として五万円又は六万円の金が落ちることになる。此の金は海の二十万円以上に相当する堅実な副業である。

右を達成するには旧来の惰性に因はれてゐて米、粟を貯蔵し、凶作の年の備へるが如き堅忍持久の構へは逆も他字人が思ひも寄らざる堅実さである。

そして今でも各戸に備荒倉庫を維持してゐて米、粟を貯蔵し、凶作の年の備へるが如き堅忍持久の構へは逆も他字人が思ひも寄らざる堅実さである。

唯遺憾な事には原始農業の域を脱せず旧態依然として肥料作であるのと、作物が米の少々と主に甘藷、麦、粟に限られ

て堆肥として使用すれば申し分がない。抑々桑に肥料の過ぎる事はない。多く施せば施すほど芯が伸びて葉数が増し、尚葉が大きくなる上に厚さが増して普通の三倍も五倍もの収量可能である。春秋二期蟹漁と付き合いはないから、何等不安はない。現議員諸氏は先輩であり、凡ての音頭取りであれば祖先の血を享けた勇敢性に頗み是非実行して國策に副ふと共に、文化生活へ一步前進せられんことを望む。

次に但馬中即ち改良和種の有利なる事は今更贅説するまでもない。之等も共に奨励すべきである。

(『先島朝日新聞』昭和十四年一月三十日、二月三日、二月六日)

波照間島の人口動態

—近世から現代まで—

通事孝作

「はじめに」

八重山の人口に関しては『八重山島風土病調査書』に古い時代の記録がある。

同書に「八重山島年來記ヲ閱スルニ今ヲ去ル四百余年前人口六百余人・・・」と記述があり、一四〇〇年代後期の人口を知ることができる。

八重山の島々を踏査した笹森儀助も『南島探驗』（一八九三年）に「八重山土人の口碑によれば八重山郡島は延徳二年（一四八九年）の頃は、人口僅かに男女合計して六百余なりき」と書き綴っている。

八重山の人口がオヤケアカハチの乱前の当時において、六〇〇余人とは考えられない数値であり、記録の信憑性を疑いたくなる。その後は文献上では一六〇七年（慶長十二年）に五五〇〇人との記録

がある。これらが古い時代の八重山全域の人口数値だが、波照間島はどうだったのか、明らかでない。

記録に登場した波照間島の最古の人口は、一六五一年の時で六一六人である。

近世から現代に至る社会状況を概説しながら古文書や文献資料に表れた人口数値及び、その増減理由等をさぐりたい。

〔時代区分と人口推移の概要〕

沖縄の近世社会は歴史的な時代区分によると、島津氏の琉球国侵攻（一六〇九年）から始まり、明治政府による琉球処分（一八七九年）までの二七〇年間を指している。八重山の歴史の時代区分も沖縄史と同一と見ることができるが、八重山は近世社会の形態と発展過程において

独自の展開を示していた。

それは人頭税であり明和の大津波等で、これらは八重山の社会に負の大きな陰を落とした。民衆の生活は困窮を極め、村落を疲弊させた。波照間島も八重山社会の一員であり当然、影響を受けた。その中で人口を見ると、明和の大津波を分岐点として津波以前は人口増加は著しく、以後は人口衰退状況が続いている。

沖縄の近代社会は琉球藩設置（一八七二年）から沖縄戦終結（一九四五年）までと規定される。この時代は沖縄社会が琉球国廃止、沖縄県設置によりヤマト社会に強制的に組み込まれ、天皇制国家の一員となつたことである。ここにおいては皇民化教育が実施され、最後には軍国主義の下で太平洋戦争に突入。戦争末期には沖縄戦で「鉄の暴風」が吹き荒れ多くの死者、戦傷者が出了。

八重山は沖縄本島のように地上戦はなかつたものの、空襲が激しく機銃掃射による死亡者もあつた。しかし、死亡のはほとんどは昭和二〇年四月から六月にかけての強制疎開による戦争マラリアだつた。その中でも波照間島の住民は西表島に

強制退去させられ、当時の人口一五九〇人に対し四七七人がマラリアによって死亡した。全人口に対する死者の比率は異常なほど高く、後の社会復興に大きな影響を与えた。

戦争開始前の人口一五九〇人は近世末期から近代、現代において最も高い数値である。

沖縄の現代社会は戦後に始まり、二七

年	戸数	人口	史料及び文献
1651年(順治8年)	—	616人	『八重山島年來記』
1734年(雍正12年)	—	1470人	『八重山島年來記』
1737年(乾隆2年)	—	1144人	『各村之沿革人口増減表其他史料』
1753年(同18年)	—	2069人	『各村之沿革人口増減表其他史料』
1760年(同25年)	—	1648人	『各村之沿革人口増減表其他史料』
1761年(同26年)	—	1442人	『各村之沿革人口増減表其他史料』
1771年(同36年)	—	1528人	『大波之時各村之形行書』
1872年(明治5年)	103戸	440人	『琉球新報』
1880年(同13年)	126戸	623人	『沖縄県統計資料』
1892年(同25年)	130戸	665人	『各村之沿革人口増減表其他史料』
1904年(同37年)	131戸	792人	『琉球新報』
1906年(同39年)	134戸	842人	『琉球新報』
1909年(同42年)	133戸	877人	『沖縄毎日新聞』
1918年(大正7年)	143戸	1023人	『先島新聞』
1925年(同14年)	156戸	1180人	『八重山郡勢要覧』
1929年(昭和4年)	176戸	1296人	『先島朝日新聞』
1931年(同6年)	—	1283人	『八重山郡勢要覧』
1933年(同8年)	189戸	1322人	『八重山郡勢要覧』
1935年(同10年)	—	1380人	『八重山郡勢要覧』
1939年(同14年)	—	1423人	『八重山郡勢要覧』
1945年(同20年)	—	1590人	『八重山郡勢要覧』
1947年(同22年)	202戸	1064人	『新八重山』
1948年(同23年)	216戸	1122人	『新八重山』
1949年(同24年)	216戸	1235人	『新八重山』
1950年(同35年)	217戸	1446人	『竹富町役場町民課』
1965年(同40年)	228戸	1356人	『竹富町役場町民課』
1970年(同45年)	219戸	1256人	『竹富町役場町民課』
1972年(同47年)	225戸	967人	『竹富町役場町民課』
1974年(同49年)	224戸	864人	『竹富町役場町民課』
1978年(同53年)	237戸	800人	『竹富町役場町民課』
1979年(同54年)	232戸	761人	『竹富町役場町民課』
1985年(同60年)	241戸	718人	『竹富町役場町民課』
1988年(同63年)	245戸	707人	『竹富町役場町民課』
1990年(平成2年)	238戸	678人	『竹富町役場町民課』
1993年(同5年)	237戸	637人	『竹富町役場町民課』

近世から現代に至る波照間島の人口推移一覧抜粋

年間にわたって、米軍統治下に置かれた。そして一九七二年五月一五日に本土復帰を果たし、今日に至っている。復帰前までの波照間島の人口は一〇〇〇人台を維持し、多少の増減はあるが、その幅は比較的弱かった。

八重山全体でもほぼ同様だったが、復帰直前から直後にかけて本土資本による土地買収が、大半ば等があり離島に住む人々が次々と島を離れた。離島に過疎化の荒波が押し寄せてきたのである。波照間島は他の島に比べ人口流出は激しくはなか

ったが、それでも人口は段階的に減少している。しかし、最近の人口減少は目を覆うものあり、竹富町の他の島じまと比較した時、人口の減少は急角度を描いて下っている。それは初めて史料に登場した一五六一年の六一六人に迫りそうである。

〔近世期の人口推移の特徴〕

八重山は沖縄において近世の人口動態の概要を把握できる地域といわれる。それは人口統計を明示した各種資料が去る大戦でも滅失せず残っていることが主な理由だが、近世期の人口を知る基本的な資料としてどのようなものがあるのだろうか。

本稿で用いた史料は『八重山島年來記』『各村之沿革人口増減表其他史料』『大波之時各村之形行書』であり、項目によつては八重山全体の人口しか示さず、村々まで具体的に書き込んでいないものもあるが、それでも信用できる史料である。

『八重山島年來記』は八重山の前近代史を理解するうえで不可欠の基本史料で、

編本体で各種出米事を摘記している。内容は人事往来、天災地変、村落の移動、人口変動等、八重山を概観する情報が多彩に盛り込まれている。

『各村之沿革人口増減表其他史料』は喜舎場家文書に所蔵されている。この史料は諸史料より抜粋したものだが、成立は不明である。史料には詳細に各村の人口が記載されている。

『大波之時各村之形行書』は一七七年に発生した明和の大津波の後、当時の行政庁、藏元から琉球王府に提出された

大津波の詳報である。内容は住民の溺死、家屋、農作物の被害等が中心である。さらには津波による被害村落の人口減少に伴う他村からの住民移動もあり、人口動態の1理由として把握できる。具体的に波照間島から白保村、大浜村への寄百姓である。

近世八重山の人口動態の特徴は、第一に一六〇〇年代初期までの停滞期を受け、一六七〇年代から上昇期を迎え、一七六〇年代には最高潮に達し、驚異的な人口増加を示していること。

第二は突如、一七七一年旧暦三月一〇日に発生した明和の大津波を契機に人口は一挙に激減期に入ったこと。第三は一七八〇年代以降は低落期に入ったことである。

波照間村之内平田村百姓男女四五拾人程大波照間与申南之島江

欠落仕候……

時代の流れに沿って人口の推移を見た時、近世の八重山は停滞期、上昇期及び増加期、激減期、低落期及び衰退期に特徴づけることができる。波照間島も八重山全体の特徴とほぼ符号するが上昇期の始まりが若干、遅れるようである。

ここで何故、各期の特徴が表れるのかを分析してみることにする。停滞期は島津氏の琉球侵攻があり、人頭税が施行され統治機構、租税制度が確立された時期である。

薩摩、琉球王府の封建的な生産収奪が厳しく八重山の社会は全般的に進展なき状況にあつたことが予想される。島民の集団逃走である「欠落」の増加が人口停滞の一要因であろう、とする見方もある。

波照間島について一六二九年当時、島には「はてるま村」「ひらた村」「あらんと村」があつたが、一六四八年に平田村

の住民が南の島を目指して島抜けを計っている。つまり「欠落」だが『八重山島年來記』にその記述がある。

これが島抜けの文言だが集団脱走は王府の租税徵収が厳しくいため行つた、といふのが通説である。人口については初めて一六五年に登場する。『八重山島年來記』に「波照間村頭數式百九拾八人平田村頭數三百拾八人」とある。両村を合計すると六一六人となる。

人口統計はそれ以後、記録がなく一七三四年になって一四七〇人との記録が表れる。そのため八〇年間余の人口推移は不明だが同年、南風見村へ男女四〇〇人が寄百姓、つまり強制移住させられている。『八重山島年來記』を見ると人口の記述はないが、一七一三年に白保村へ三〇〇人余が波照間島から移住させられている。

波照間島の人口は一七〇〇年代初頭に増加の上昇期に入るが、それは急カーブを描いて増え続ける。そして一七五三年建ては厳しく難波を極めた。「崎山節」には村落の生活の様子が語られている。



祭りに参加した島の人々

には二〇六九人をマーク、初めて二千人台を突破する。この数値は波照間島の歴史上、最高の人口記録である。

一七五五年には崎山村を創建するため、二八〇人が移住させられている。新村建

てはこのほかに網取村、鹿川村、祖納村からの移住者を含めて行われている。村建ては厳しく難波を極めた。「崎山節」には村落の生活の様子が語られている。

中鉢氏は波照間島では古琉球期において麦、粟等を主体にした農業形態だったが近世初頭当たりになると、畑作中心の島に米への選好が押し寄せてきたと説く。

そして稻作の導入は初期の人口増加を支える役割を果たしたと思われるとも説いている。

人口が増える理由は農業形態の改革、農業生産高の増加等のほか様々なことが考えられるが、封建的規制下における人口増加は耕地の不足、食糧事情の悪化等を招き村落共同体を危機に陥れた。

これに対して琉球王府、蔵元は村落移動と農業耕作に対する指導監督の施策を開拓している。これは先に書いた波照間島住民の白保村、南風見村、崎山村への強制移住に表れている。

しかし、寄百姓が行われたにもかかわらず、人口の回復力は根強さを示した。これは波照間島にとどまらず他の島も同

様で、人口増加を続けている。この中で村落共同体の内部では間引き、赤子埋殺等の最悪の事態が進行していた。

琉球王府は人口増加に対応して農業施策を実施した。それは鉄製農器具を普及させ、農作物の収量増大を図るとともに、食糧確保策として各種雑穀類の生産奨励、甘藷の導入普及であった。

特に甘藷の普及は、食糧供給の安定化を図ることに結びついた。また荒地の開墾で王府は租税の増加確保を図ることに力を注いだ。新村建ての狙いは、貢納米の増加を計ることに主眼を置いた。

八重山の人口の増加傾向は波照間島も含めて明和の大津波まで続いたが、それ以降は石垣島では住民の津波による死、「波照間島では寄百姓が激しく、人口は激減となり低落期衰退期に入った。

大津波では九三一三人の死亡、行方不明者を出し大きく人口に断層が生じた。津波については『大波之時名村之形行書』に詳しい。波照間島では津波の被害はほとんどないが、王府の寄人政策によつて人口が流出した。八重山においては強制

移住は人口動態の一要素を占めている。

『大波之時各村之形行書』に津波に伴う寄百姓の記述がある。

波照間村

頭高男七百參拾九人女七百八拾九人メ千五百武拾八人罷居候処
大波石垣方向前一時ニ揚男拾武人女武人メ拾四人公事ニ付石垣
ヘ罷渡致溺死男女千五百拾四人罷居其内ヨリ男百九拾參人女武
百武拾五人メ四百拾八人白保村ヘ男武百八人女武百拾老人メ四
百拾九人大浜村へ人配仕残ル男參百武拾六人女參百五老人メ
六百七拾七人罷居御嶽並井無別條候へ共左記ノ通波損仕申候

この記述によると大津波の時、人口は一五二八人だったが、津波後は溺死一四人により一五一四人。そして白保村へ四一八人、大浜村へは四一九人、強制移住させた。このため残った人口は六七七人になった。それは島の人口の半数以上が

移住させられたことであり、島は急激に人口減少となつた。これは島社会の発展を大きく阻害し、その影響はあらゆる点で出たであろうことは推測できる。

波照間島の人口統計は近世期において、一七七二年から一八七一年までの九九年間、記録が見付からず、その間の人口の推移は明らかにすることはできないが、八重山が低落期、衰退期にあることを勘案すると波照間島も同様であったことが推測できる。

どうして人口は増えず低落状況に陥つたのか。まず考えられることは流行病、飢餓等の災害である。史料を見ると病疫は大津波による影響があり、さらに干ばつに伴う飢餓による餓死者、疫病による死者があり、各村で死亡する人々が出ている。

波照間島に関しては史料を探すことができないため、明確な人口減少の理由を明らかにすることはできないが、疫病は波照間島でも発生し、島民に打撃を与えたであろうことは推測の域を出ないが、それは今後の研究課題である。

波照間島の近世末期の人口統計は、一八七二年になつて四四〇人と表れ、島の

人口が史料に登場してから最低を記録。明和の大津波では寄百姓により六六七人となつたがそれ以後、人口は衰退傾向を示し最悪な状態となつてている。

〔近代、現代期の人口推移の特徴〕

一八八〇年になると六二三人と上向き傾向で明るさを見せ、そして近代期を迎える。この時期の史料は『沖縄統計集成』と新聞だが、国勢調査が始まるまでの新聞資料は確實性には乏しいかも知れない。国勢調査は一九二〇年が最初で、それは新聞でも扱われており、新聞資料でも行政機関が発表したものであるため、資料的価値は十分にある。このほかに八重山支庁がまとめた『八重山郡勢要覧』もあり、行政機関が作成した資料として信憑性が高いと思料する。

八重山では近代期において一八七三年を境に人口上昇の気運が見られるが、波照間島の場合、資料不足のため明らかに

することはできない。提示した資料では一八九二年頃から上向き傾向を示していると判断してよからう。

人口増加の理由はいろいろ、考えられるが封建制度の崩壊、マラリア有病地の強行的な開拓政策の取り止め、人頭税の



サトウキビの刈り取り作業をした島の住民

が条件付きながらも実現できたことが根底としてあるだろ。

人口は大正期、昭和初期に入つても上昇し波照間島では一九四五年に一五九〇人となり、ピークに達した。しかし、戦争となり戦闘による戦死者、マラリア戦病死者で人口は急激に減った。

現代に入つて住民はようやく生氣を取り戻し、除々に社会回復が図られた。この期の資料は『新八重山』と竹富町役場がまとめた資料が中心であり、信憑性はかなり高く信用できる史料である。

入手した資料は戦後、最も早い時期においては一九四七年で、当時はまだ戦争の爪跡が残つてはいるものの、次第に社会的、経済的に回復の兆しが芽を吹き出していた。人口も増える状況を見せてい

る。

一九四七年頃から第一次ベビーブームとなり、人口は急カープを描いて上昇を続けた。島では人口は一三〇〇人台から一四〇〇人台を一九七〇年頃までキープし、島は戦前と同じ人口となり活気に満ちあふれた。

しかし、本土復帰を境に人口は減少傾向をみせ、復帰の一九七二年には九六七人となり一〇〇〇人を割り込んだ。現在

の人口減少は様々な要因が考えられるであろう。復帰に伴い社会状況が急変したが、加えて産業基盤も大きく変わった。

島は農業中心の村落社会だが、以前はカツオ漁業もあり、活況にみなぎっていた。現代は、我々が生きている社会であり、島の活性化を図り将来の展望が開ける島を創出することであろう。

〔おわりに〕

人口動態を規定する基本的な要素は妊娠率、離婚率、死亡率といわれる。これはフランスのアナール学派のオビニオン・リーダーであるル・ロウ・ラデュリが述べている。確かにそうだが、八重山においては強制移住という人為的な政策があった。これも人口動態のひとつ要素である。年齢別の人口ピラミッドについては改めて報告したい。

本来の生活を取り戻すことができたこと

《史料紹介》

西表治安裁判所の印影



西表治安裁判所之印と刻印された印影

【印刻字】

西表治安裁判所之印

（印材）柘

（大きさ）タテ・ヨコ各四・五センチ

（印刻者）玻名城寛陞

八重山民政府時代の一九四七年（昭和二十二）九月二十二日、西表島西部の祖納に西表治安裁判所が設置され、同年十二月一日に西表初等学校で開庭式が挙行された。治安裁判所は石垣市、与那国町にも設けられた。竹富村（当時）は行政区域が広く、多島からなるため、最も広大な西表島に裁判所を置くことになった。治安裁判所の印判は所在不明だが、印影は当時、使用されていたものの押印の写しである。

戦後沖縄の治安裁判所は米国軍政府特別布告第十九号に基づき、沖縄本島十一地区に設置されたことで始まった。布告は軽罪の裁判を迅速かつ公開して行うことを目指して発せられた。西表治安裁判所の判事は富本勉氏、書記官には本原実氏が任命された。しかし、八重山民政府告示第二十二号によって一九四九年（同二十四）四月七日、廃止になり、石垣治安裁判所に編入された。

一柴田村政の顛末一

御挨拶
謹啓 各位益々御清榮の段奉賀候

陳者不肖妻の三月廿九日の村會に於て滿場一致ぞ口
て竹富村長に當選議員各位の懇情もだい難く漫學非
才を顧みず就任致すと相成候 諸君は竹富村更生
の爲粉骨碎身努力致す覺悟にて候間何幸ニ翁の御指
導御親睦を賜はう度延に紙上を以て愚願御挨拶申上
候 四月三日 敬白

村長就任の挨拶

竹富村長 柴田米三

竹富村民各位
八重山郡尋知各位

御挨拶
拜啓 去る三月廿九日竹富村會に於て滿場一致村長に
選舉せられ議員各位の御歓迎もだい難く受諾杜り候ひ
しが一部議員の方より異議申し立有之候爲め村會の滿
場一致に異變有之受諾を取り消し茲に村長辞任仕候
備かの時間色々御厚意を賜りたる各位に深甚の謝意を
表し今後益々御交誼財はらん事を御願申上候 早々頃音
四月十五日

村長辞任の挨拶

竹富村民各位 柴田米三

竹富村民各位 柴田米三

竹富町は竹富村政時代（大正三年四月一日）昭和二十三年七月一日）に十三人の村長（第十三代は途中初代町長に）が村政の舵取りをしてきた。在任期間は村長によって様々だが、平均すると三年弱である。在任期間で異彩を放っているのが柴田米三村長。一九三八年（昭和十三）三月三十一日就任、同年四月十三日退任と、わずか十四日間の存在である。

柴田氏は一八九〇年（明治二十三）首里市山川生れ。一九三七年（昭和十二）以降、石垣町で歯科医業を開業したが、政界にも乗り出していた。安里武信

村長の新城郵便局長への転身に伴い、白羽の矢が立った。当時、柴田氏は県議会議員の要職にあつた。戦前の首長選挙は、一般住民が投票する直接選挙ではなく、議員が選出する間接選挙だった。安里村長辞任後の村長選挙は、

一九三八年（昭和十三）三月二十九日に執行することが決った。

その時、上間廣起、次呂久英松の両氏の立候補が見込まれていたが、波照間、黒島、新城、一部小浜、西表選出の議員らが集まり、県議の柴田氏を推すことを決めた。その時点で村長選は三つ巴戦の様相を呈した。その後、多数派工作により、ほぼ柴田氏一本で固まつた。

竹富村の議員定数は當時十八人（一人死亡欠）。議会は、柴田氏の公民権特免に関する決議を採択した後、投票に入つた。投票は竹富島選出の二議員が欠席及び退場した中で執行。議員十五人の満場一致で柴田村長が誕生した。柴田村長の当面の課題は、赤字財政の克服と村役場の石垣町への移転実現であった。

柴田村政は一応、議員の全会一致で船出したが、当初から波乱ぶくみであった。竹富選出の三議員が「柴田氏の公民権特免に異議あり」として県知事に陳情書を提出。これに対して柴田村長は不快感を示し辞任を決意。「全会一致でないことが判明した」として辞表を提出した。柴田政は四月十三日に終止符を打つたが、二週間と短命だった。

—慶来慶田城屋敷遺跡—



竹富町指定の史跡・慶来慶田城屋敷跡

八重山郡雄割拠時代の十五世紀後半に

た慶来慶田城用緒が居住した屋敷跡である。慶来とは「げらい」で築城を意味すると言われ、「おもろさうし」にもしばしば登場する。

用緒は錦芳氏の先祖で、一四五七年（天順一）に生誕。童名はまもの（『八重山島年來記』）。十八世紀初頭に初代を記録した『慶来慶田城由来記』によると、祖納に定住する前は外離島の野底辻に居住し暮らしていたという。しかし、野底辻は土地が狭く村建てすることもできず、諸事を調えることができないので、しばらくして祖納半島にある上村の「東石屋」に屋敷を構え生活したと言われる。

『慶来慶田城由来記』には「野底辻ハ地方狹ク有之、其上村建不罷成所、彼是諸事調成方不自由、思様相成不申候故、祖納村江罷渡ふちこ与申所屋敷相求、三四四年居住候處、其処ハ島崎ニ而朝夕波之おと聞きうちこ有之ニ付而、能屋敷相求度村内惣廻仕、東石や之屋敷ニ住居候處世をこらし□申事候由・・・」とある。由來記にはまた、石垣島北部で勢力を誇

り、地域住民を苦しめていたという、平久保加那按司を征討したことも記す。

屋敷跡は現在の祖納の集落から石畳道を登った場所に石積み開いされて広がる。傍らには鍛冶屋跡がある。一九九四年（平成六）に県教育委員会文化課による発掘調査が行われた。調査は慶来慶田城用緒と、その時代に生きていた人々の生活や文化を調べ、西表の貴重な文化的財産として遺跡を永久に保存し、子孫に受け継いでいくことを目的に実施された。

屋敷跡から当時の色々な生活用具が発掘された。八重山式土器、青磁や染付の磁器、南蛮甕と呼ばれる褐釉陶器、それに舟造りや家屋の建築に使用されていたと思われる鉄釘、鉄滓、猪や魚の骨、貝がらなどが検出された。さら「オレンジがかかった石を丸く磨き、小さな穴をあけて作った丸玉、ガラス製の小玉も出土。鍛冶屋跡からは二尺×一・五尺の長方形をした石組の遺構が一基検出された。石積みの周辺からは、土器や陶磁器などの大きな破片が出土した。発掘調査は一九九六年（平成八）度まで実施された。

琉球王府から西表首里大屋に任じられ西表島西部の祖納を拠点に活躍し、後に

幸本御獄



竹富島には大小合わせて八十六か所の御嶽あるといわれる（喜舎場永珣、上勢頭亨両氏の調査）。しかし、琉球諸島の

公事御嶽を記した『琉球国由来記』、集落及び一門が信仰対象とする御嶽を合わせると二十数カ所のようである。島では最も神高い御嶽に「六山（ムーヤマ）」があるが、幸本御嶽（コントウオン）もある、「六山」のひとつを形成する。

れ、住民のために尽くされたので、豆の神様として祀られた。海の方は、西方の一部を分けてもらい、自分の海として生活の一助にされた（崎山毅著『蠍螺の斧』より上間行意ノート）との伝説がある。竹富島の場合、具象化した祭神が多いが、幸本御嶽は「豆の神」を祀つてある。語り継がれた伝承がこれを物語る。

幸本節瓦（コウモトフシカワラ）が祖神を勧請し、神山の奉ったことに始まるとな
伝わる。嶽名は御嶽の所在地の小字が小波本であることから、小波本の名称が使
われることもある。幸本御嶽を中心とする集落は、神山の周辺に広がり、古くは
小波本村として繁栄したが、島が狭小なこともあり、その後、仲筋と合わせて村
落を形成した。御嶽は、小波本村が仲筋村として創建された後も、村人の中心的
な祈りの場所となつた。

御嶽の願い口には、「幸本ふしかわら神殿、降りみそーる大やん主やん」「久米島から、おーり願い始みおーる大やん主やん」「根うすい、降りみそーる大やん主やん」などと詠まれる。トウニムトウは前泊家。神司も古くから同家の出自だったが、現在は変わっている。神司は請盛ユキさんが務め、祭祀を執り仕切る。

島には古くから「小波本の王は、坡座
村として創建された後も、村人の中心的
な祈りの場所となつた。

御嶽内にはニライカナイの神を招く聖地である石段状に積み上げられた小城場（クツクバ）御嶽がある。同御嶽は旧暦八月八日の「ユーンカイ」の時、重要な折りの場となる。『琉球国由来記』巻二十一によると、神名は「國ノ根ノ神山」イビ名は「モチャヤイ大アルジ」。嶽域にはタブノキなど亜熱帯常緑樹が繁茂する。

收藏図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。あわせてお礼申し上げます。

寄贈者御芳名	受贈図書名
南風原町教育委員会	与那霸が語る沖縄戦
南風原町史編集委員会	神里が語る沖縄戦
沖縄県立図書館	歴代宝案研究 第6・7合併号
嘉手川重昭	石垣仲筋会創立十五周年記念誌
南山舍	八重山の戦争
阿佐伊孫良	第3回琉球・中国交流史に関するシンポジウム論文集
阿佐伊家的新築祝い	歴代宝案訳注本第1冊
県立図書館八重山分館	八重山の民話 第四輯
名護市史編さん室	戦後新聞記事目録 第4集
東京沖縄県人会	関東地区 沖縄県人名簿
沖縄国際大学 南島文化研究所	多良間島調査報告書 (2)
南島文化 第14号	南島文化 第15号
第16号	第16号

東京大学海洋学部海洋観測委員会

海洋観測データ 第16号

糸掛けてい昔世ぬ謡心踊い心

島々美しや 世果報村づくり

新日本分縣地圖 全國地名總覽

八重山國俗關係文獻目錄

新編東方藝術大辭典

石垣市史叢書

明治政府の時代と因銭

かの女性史記言集第三号

八重山文庫 第4号

第二步

卷之三

11

金言錄

萬葉集卷之三

卷之三

清獻公集卷之三

新編源氏物語卷之三

清獻公集

清獻公集

御用文書

目錄

中山王府相卿傳職年譜 位階定
嘉德堂規模帳

羽地落穂集—旧羽地間切地方文書集成—

沖縄近代詩集成（I）

（II）

（III）

（IV）

琉球救國護願書集成

尚家本「おもろさうし」

「唐旅」旅行—琉球進貢使節の路程と遺跡・文書の調査—

琉球の方言 窫美大島宇検村湯湾方言

宮古大神島

奄美喜界島志戸桶

奄美徳之島井之川

久米島烏島

奄美沖永良部島の方言

助詞特集

13 12 11 10 9
八重山・与那国島

購入図書紹介

多数の書籍を購入していく
が、紙面の都合上その一
部を紹介します。

購入図書紹介

多數の書籍を購入していま
すが、紙面の都合上その一
部を紹介します。

著者名	国書名	発行所名
比當嘉政一夫	沖縄テレビ放送株 那覇出版社編集部	よみがえる 戦後の沖縄 写真記録
辻原朝敦之有	坪井清足・平野邦雄監修 那覇出版社編集部	「平和の礎」 新版「古代の日本」 第3巻九州・沖縄
環中國海の民俗と文化1 海洋文化論	幕藩制国家の琉球支配 「歴代宝案」の基礎的研究 環中國海の民俗と文化	那覇出版社編集部
株凱風社	校倉書房	那覇出版

奥田江暁昭子	入江真栄平房昭	琉球新報	田名眞紀	村井	保坂	高良倉吉・豊見山和行・	西原文雄	平治雄	渡邊令雄	渡邊欣雄	植松明石
女性史再考→V	太平洋戦争の起源	新琉球史 —古琉球編—	沖縄近世史の諸相 新しい琉球史像	の発生	南島イデオロギー	琉球王國史の課題 戦争動員と	ジャーナリズム	経済史の方法	沖縄近代	沖縄の祖先祭祀 文化4 風水論集	環中国海の民俗と文化3 祖先祭祀
株凱風社	第一書房	校倉書房	砂子屋書房	校倉書房	櫻角川書店	那覇出版社編集部	那覇出版社	那覇出版	第一書房	株凱風社	環中国海の民俗と文化2 神々の祭祀

藤原ひるぎ	太田ひるぎ	第一書房	新琉球史 —古琉球編—	高良倉吉・豊見山和行・	田名眞紀	村井	保坂	高良倉吉・豊見山和行・	西原文雄	平治雄	渡邊令雄
株凱風社	株太田出版	第一書房	新琉球史 —古琉球編—	新琉球史像	琉球王國史の課題 戦争動員と	琉球王國史の課題 戦争動員と	経済史の方法	沖縄近代	沖縄の祖先祭祀 文化4 風水論集	環中国海の民俗と文化3 祖先祭祀	環中国海の民俗と文化2 神々の祭祀
株凱風社	ひるぎ社	第一書房	新琉球史 —古琉球編—	新琉球史像	琉球王國史の課題 戦争動員と	琉球王國史の課題 戦争動員と	経済史の方法	沖縄近代	沖縄の祖先祭祀 文化4 風水論集	環中国海の民俗と文化3 祖先祭祀	環中国海の民俗と文化2 神々の祭祀

業務日誌

「新聞集成Ⅲ」昭和初・中期の新聞による竹富町関係略年表
昭和十五年、十六年、十七年、十八年、十九年、二十年分作成、名手辰巳。

成，略年表完成。

四月一三日

・戦災実態調査及び町史編集資料収集のため、白浜へ日帰り出

〔新聞集成III〕昭和九、十、十一、十二、十六、十七、十八、
二〇、二二三〇切文、昭七又重刊、送付。

四月二日

「戦争体験記録」附録及び編集後記を執筆。

四月四日

「新聞集成Ⅲ」昭和初・中期の新聞にみる竹富町関係略年表

昭和九年、十年分を作成。

四月七日

・町史編集室、平成九年度最初の定例会議、九年度の年間計画

四一八

〔新聞叢書II〕昭和初年中國の新聞二種の竹書丁闇系略正義

「新開集解」時稱得

四月九日

・竹富町史編集室専用原稿の追加印刷。

四月一〇日

「新聞集成III」昭和初・中期の新聞にみる竹富町関係略年表

昭和十三年、十四年分作成。

四月一四日

七月二日

・「新聞集成Ⅲ」凡例、略年表の初校、昭和九年、十年、十一

年、十六年、十七年、十八年、十九年、二十年の二校、燐光
文堂印刷へ送付。

・「新聞集成Ⅲ」索引作成作業に着手。項目抽出作業に取り掛
かる。

九月二九日

・県地域史協議会一九九七年第二回研修会（宿泊）に向けて、
那覇、本部、与論、沖之永良部経由で徳之島へ五泊六日出張。

（職員一人）

八月四日

・町史編集室定例会議、八月の業務計画検討。

八月一一日

・地域活性化交流事業の懇談会及び交流会が竹富島で開催、日
帰り出張。（職員一人）

八月二十五日

・第四回ばいぬ島まつりのばいぬ島写真展に向けての室内会議
及びパンフレット作成。

八月二六日

・ばいぬ島写真展に展示する写真五十六点を石垣市史編集室か
ら借用。

八月三十一日

・第四回ばいぬ島まつり、大原で開催。ばいぬ島写真展に延べ
六百人の参観者が足を運び盛況。

九月一日

・「新聞集成Ⅲ」昭和十二年、十三年、十四年、十五年の二校、
燐光文堂印刷へ送付。

九月三日

・町史編集室定例会議、九月の業務計画検討。

九月二四日

編集後記

◆『竹富町史だより』第十二号を発刊することができました。町史編集室では、第十一巻「新聞集成Ⅲ」の編集を終え、現代第十巻「近代・前近代」の編集発刊及び「島じま編」の編集に向けて史資料の収集に取り組んでおります。それに伴って「町史だより」は今後、史資料の紹介に重点を置くことにしました。

◆今号は波照間にスポットを当て、新聞資料、写真資料、それに論稿を掲載しました。「島じま編」の発刊に向けては今後、島ごとに収集した史資料を紹介していく予定です。『史料紹介』では「西表治安裁判所の印影」を取り上げました。玻名城さんによると印影は残っているものの、印鑑は所在不明だとのことです。「柴田村政の顛末」では各紙とも記事扱いが派手だった。



竹富町史だより 第12号

平成9年9月30日 発行

編集発行 竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地

☎ 09808-2-9985

印 刷 八 島 印 刷